

# 日常の中の運動会

佐藤 寛子

長い夏休みを終え、子どもたちとの久しぶりの再会。また新鮮な気持ちで保育が始められそう！と、うきうきしていた二学期のある日のこと。

「ねえ！ せんせい、わたしたちは、どんなダンスにする？」

と、A子が聞いてきた。運動会のダンスの話らしい。

十月第二週の土曜日に予定されている園の運動会は、実にシンプルなものである。つなひき、玉入れ、リレー、三歳児の親子競技、四・五歳児の保護者種目、おみやげ競争、それに各学年ごとの遊戯。お弁当なしの午前中で終了。

プログラムを見ると、何年か前にタイムスリップしたような気持ちになる。そのうえ、場所も、

真ん中に花壇のある園庭のみ。実にこぢんまりとしたものだ。都内では珍しく緑の多い園庭は、その奥に高台を配し、全体ではかなり広い。けれど、運動会ときは、その高台を除く園舎に面した敷地のみを使用する。

お弁当がないことについては、保護者の評判はよい。しかし、場所に関しては、賛否両論、あるいは最近では反対意見の方が多いかもしれない。隣接する小学校の広い校庭を借りたり、小学校の運動会と合同で行ったりすれば、子どもたちも広い場所でのびのびからだを動かすことができるし、保護者も、ゆったりと観戦することができる……といった意見がその大半である。

「運動会」というハレの日を、日常から切り取って考えたとき、保護者の意見はもつともであり、そうしてしまうことに迷いはないであろう。けれど、

秋の日の一日を、わざわざ「運動会」と称して、保育の日常に盛り込む意味は一体何なのであるのか？

A子の言葉をきつかけに、早速今年も五歳児の子どもたちと、どんなダンスにするかを考えることにした。あらかじめ用意しておいた曲を流してみると、

「いいねー」

と言いながら、数人でカセットデッキに耳を寄せて聴いている。子どもたちがよく行くテーマパークで、パレードのときに使われたことがある曲らしい。知っている子どもも何人かあった。

「Yせんせいとはね、こんなふうに見てみたらいいかな？　って考えたんだけど……」

と、言いながら、隣の組の保育者とアイデアを出し合い考え、汗を流しながら練習した振りをつけ

て踊ってみた。すると、B子が一緒に踊りながら、「それよりも、こうやった方がいいんじゃないかな？」

と言ってきた。

私たちの動きよりも、ずっと曲のイメージにピッタリなうえに、全体の流れともマッチしたその振りは、すぐに周りの子どもたちにも受け入れられた。

こうして、数人の子どもたちを中心に、ダンス「イルミネーション」は、保育の中で徐々に広がっていった。遊戯室や廊下、園庭で、毎日、曲に合わせて踊る五歳児の姿を、三・四歳児が興味をもって見つめている。それを知って知らずにか、得意気に踊る五歳児は、その人数を少しずつ増やしていった。そして、全員で三〜四回合わせて踊ってみたところで、運動会の本番となったのである。

当日は、完璧なダンスとまでは、とても言えな

かったが、園児席で、五

歳児と同じようにからだ

を動かしてみている三・

四歳児の熱い声援を受

け、踊り終えた後の五歳

児の表情はとても晴れやかであった。翌週からも、

「イルミネーション」は、園のどこかで流れ、それに

合わせて踊る子どもたちの姿がそこかしこで見ら

れた。保育者も、学年を越えて、入れかわり立ち

かわり子どもたちのダンスの輪に加わった。子ども

もたちとともに楽しみながら、五歳児が三・四歳

児に、丁寧に振りを伝える様子を見て、ほほえま

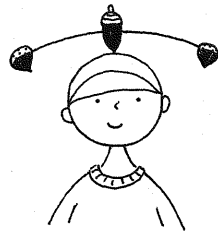
しく嬉しくなった。

冬休みを終え、三学期になっても「イルミネア

ン」は繰り返された。そして次第にダンスの中心

が五歳児から四歳児・三歳児へと移っていった。

こうなってくると、運動会の演目であった「五歳



児のダンス」は、もはやみんなの遊びのひとつになつたといえるだろう。

そして、また翌年の秋、新たな五歳児が、「ねえ！ せんせい、わたしたちは、どんなダンスにする？」と続くのである。

先日の園内研究会でのことである。その日は、

四歳児の保育について事例を中心に話をすすめたのだが、私たちの会話の中に、「つなぐ」とか「つながる」といった言葉が繰り返し出てくるのが話題になつた。「つなぐ」「つながる」といった言葉をキーワードに研究を進めているわけではないのだが、私たちの口から自然に出てくるこうした言葉は、保育の中で大切にしていることと、関連しているのだろうか。

「運動会」の位置づけは、それぞれの園によって

異なるであろう。来年度の入園予定者のことをも視野に入れ、運動会を保育公開の場とせざるを得ない場合もあるだろう。また、日常とは切り離し、「ハレの日」だからこそ体験できることの意味を追求していくこともひとつであろう。けれど、運動会も日常とつながっている一日なのだ。そして、子どもたちは、一つひとつの体験を、生活の中で遊びを通してつなげていこうとしている。

運動会の玉入れや遊戯で、子どもたちが立つ位置をわざわざラインで示さないのも、ここでの大切にしていることのひとつである。これもまた、日常の保育と大きくつながっていることだ。

降園前の集まりに、椅子を大きく円に並べるときにも、三歳児の初めから、床にしるしをつけて並べやすくすることはしていない。

登園してから思い思いに遊び始める子どもたち



が、一日の最後にみんな顔を合わせる大切なこの時間。保育者は初め、子どもたちに声をかけながら、せつせと椅子を円に並べる。毎日の繰り返しの中で、だんだんと子どもたちが自分たちで椅子を並べるようになってくるが、初めのうちはでこぼこしていて、きれいな円には程遠い形でしか並べられない。たとえば、保育者がきれいに並べても、腰掛けて話を聞いているうちに、前にどんでんでくる子どもがあつたりして、なかなか整然とならない。ところが、一年二年と生活を積み重ねてくるうちに、隣の友達との距離を感じ、みんなと暮らす意味を知り、前に出たり後ろに引つ込んだりせずに整然と並べるようになってくる。

四歳児の玉入れで、ちょっと苦労しながら、でも、きれいな円ができてくる過程は、友達との違いを感じてきた子どもたちが、少しずつ仲間と暮らす楽しさを理解してきた姿であろう。

先生の周りに団子のように集まってうごめいている三歳児の遊戯もまた、保育者を抛り所にして身を寄せ合って過ごしている三歳児の日常そのものである。

日々の生活の場である園庭で行う運動会。園児席の目の前で繰り広げられるそれぞれの子どもの様子は、「ハレの日」ではあるが、日常の子どもたちの姿である。

そして、幼稚園生活最後の運動会で、五歳児は、仲間との一体感をより身近に感じると同時に、三・四歳児の様子を見て、今まで自分たちが歩んできた時間を振り返るのだろう。そして、三歳児、四歳児にとって、五歳児の姿は、未来の自分たちにつながる姿なのだろう。

さて、こうした「運動会」の意味を、どのように

保護者に伝えていけばよいのかが、私たちの一番の課題である。

すぐに明確な答えが出ない保育の営みは、今の社会の早さに合わないのだろうか？

「もう少し待ってみてください。後から振り返ってみると、ここで大切に行っていることがきつとわかっていただけだと思いますから」などというのんびりした態度では、きつと伝わらないのだろう。

「運動会」を、日常の一コマと考えるのならば、「運動会」の意味を伝えることに加えて、日々の子どもたちの姿をさらに丁寧に伝えていくことが大事なかもしれない。

子どもたちとのかかわりの中で、私たちが得ている豊かな時間を、少しずつでも保護者と共有していくことが、私たちに課せられたもう一つの仕事なのだから。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)